

大津市民病院
地域医療連携室
だより
●第18号●



健診部の紹介 診療部長 洲崎 聡

（左は開設時より活躍の川崎千都）



健診部は平成11年、新病院開設とともに造設され、人間ドック(日帰り、一泊)をはじめ、各種健康診断、大津市指定の健診や検診(特定健診、大腸がん検診、肺がん検診、ウイルス肝炎検診)および、企業の健康保険組合からの嘱託健診、さらに予防接種(インフルエンザ、B型肝炎、肺炎球菌、子宮頸癌)を行っています。

診察と結果説明を担当する医師は、平成22年11月現在、川崎(日本人間ドック学会認定医)を中心に、三澤(前病院長)、青木

(診療局長)、池田(回復期リハビリテーション部部长)が日替わりで対応しています。

これまでの10年間で、ドックは1万人以上、各種健診および検診は約5万人の方に受診していただいております。近年の高齢化や、メディアからの健康情報が増えるにつれて、市民の健康管理に対する意識は年々高まっていると考えられ、ドック受診者数は年々増加し、平成21年度は1,708名の方が受診されました。うち呼吸器4.3%、循環器5.0%、腎膀胱・前立腺8.1%、消化器5.9%、肝胆道・膵臓4.6%、糖尿病4.0%の方が要精査となり、医療機関受診をお勧めする通知を発送しております。

これらの方々に対して当院では、地域医療連携室を通じて各診療科と連携をとり、疾患の早期発見と治療およびフォローアップに努めております。昨年度のドック後、当院で診療を受けられた方の中から、詳細な人数は把握できておりませんが、胃・大腸・肺・膵癌が発見されました。

ドックの受診希望者の増加にともない次

第に予約待ち期間が長くなり、苦情をお受けするようになりましたので、予約枠を少しずつ増加して、現在日帰り、一泊を含めて人間ドックは1日定員9名としております。それでも2、3ヶ月の予約待ちが発生してありますが、そこで今回、皆様によりお知らせがあります。

大津市民病院改革プランに健診部の拡充がうたわれておりますが、ようやく今年度末、病院別館の一部改装工事が完了し、平成23年度から装いも新たに、健診センターを立ち上げることとなりました。ドックの定員を大幅に増加する予定にしておりますので、今後一層ご利用いただきやすくなる見込みです。また、内視鏡センターも本年9月より稼動しており、ご要望の多い上部消化管内視鏡検査の定数も増加予定としております。その他、拡充にともなう各種プランを検討中です。

市民の皆様の健康を守るお手伝い役として、大津市民病院・健診センターに、ご期待下さい！

NST勉強会のご案内

17時30分～19時
※筆記用具・電卓をご持参下さい
12月9日(木)「肝硬変患者の栄養療法」
講師:消化器科

高見 史朗

CPC開催のご案内

17時30分～
12月16日(木)剖検例を対象としたCPC

公開講座のご案内

17時30分～19時
12月21日(火)創傷褥瘡処置を学ぼう
講師:皮膚・排泄ケア

認定看護師

大森 陽子

～上記すべて
9階会議室～





神経内科の紹介

診療部長 そのべ 園部 まさのぶ 正信

神経内科は、内科の中で神経に関する疾患・病態を診療しています。診療対象となる臓器として脳、脊髄、末梢神経、筋ですが、症状や経過が疾患により多彩であり医療従事者の方々でも、受診された方を診て、神経内科疾患と確認できず悩まれることが少なくないと思います。神経内科を受診する契機となる症状としてめまい、ふらつき、頭痛、しびれ、脱力が多く、耳鼻科、整形外科、心療内科、脳神経外科、循環器疾患であることが少なくないのですが、脳の病気をまず心配され、最初に神経内科を選択されることが少なくありません。血液検査や、MRI、CTで異常のないことも多々あり、稀な病態に至るまでもれなく診断するとなると、かなり時間と労力を要し、診断に至るまでに、疑い病名が10疾患を越えることも少なくありません。そのため特に初診に時間を要することが多く、待ち時間が長くなり申し訳ございません。

ません。また認知障害や発作性疾患ではその経過や症状をしっかりと把握されているパートナーの同伴や、家庭医からの診療情報が必要となります。平成21年度の外来患者数は約14000名、うち新患が1700名余りであり、院内診療科の中で紹介率、逆紹介率共に高いのが特徴です。スタッフは常勤医3名(うち2名が神経内科専門医・指導医)と4名非常勤医が診療を担当しています。外来診療は月曜から金曜日まで神経内科専門医による2診体制で診療を行っていますので、総合内科、耳鼻科や整形外科で確定診断に至らないケースにつきましても是非ご紹介ください。

急性経過の代表的疾患として脳梗塞、てんかん、髄膜脳炎、ギランバレー症候群等があり、これらの疾患は専門外来のみならず、夜間・祝日、救急搬送は窓口となり、チーム医療で診療を行っており、平成21年度の入院患者は160名中急性期脳梗塞200名でした。一方慢性経過疾患として、パーキンソン病関連疾患、脊髄小脳変性症、筋萎縮性側索硬化症、アルツハイマー型認知症の神経変性疾患、プリオン病、スモン等があります。神経難病に対しては、初代神経内科部長の故相井平八郎先生より積極的に取り組んでおり、平成12年に滋賀県唯一の神経難病病棟と神経難病臨床研究所が開設され現在

に至っています。またジストニア治療にも積極的に取り組んでいます。

神経難病病棟では、年間200名の入院があり、その半数がパーキンソン病関連疾患であり、専門性の高い医療を提供しています。地域の医療機関や訪問看護ステーション、介護施設・事業所、保健所、難病ネットワーク協議会等とも連携して、入院治療のみならず在宅療養のサポートもおこなっています。また、厚生労働省のスモン研究班班員として滋賀県におけるスモン患者の現況調査を担当しており、毎年スモン検診をおこなっています。脳卒中診療は急性期脳卒中センターとして、脳神経外科、神経内科、救急診療部、放射線科、リハビリテーション科が協力し、急性期治療を行うとともに、大津市内の急性期病院・回復期リハビリ病院、療養型病院、大津市医師会、保健所との連携のもと脳卒中連携パスの運用を開始し、集約的かつ包括的なチーム診療に取り組んでいます。

神経内科臨床の教育におきましても、京都大学医学部より臨床教授を拝命し、京都大学医学部医学科5回生の学生を対象に定期的に1コース3週間で、病院長をはじめとする病院職員、患者さんの協力を得て神経内科の臨床実習を引き受け、将来の地域医療に貢献できる人材育成にも力を入れています。